

俺の執着に気づいていない元カノ、アホ可愛いので

身体検査♡をあっさり承諾しやがる

ゝ未練たらたらのなので奥までねちねち♡

可愛がってやろうと思いますゝ

「理人くんの考えてる未来に、私は多分いないよ」

芽衣子の声は、最初から最後まで少し震えていた。

気の弱い彼女にらしからぬ言葉だった。だからこそすぐに「あ、終わりだ」とも思った。

自分の人生において、「女にフラれる」という想定がなかった。と、その時初めて気がついた。傲慢な話である。

自分の浅はかさに打ちのめされながら、反射的に手を伸ばす。

なのに、どうしても彼女まで届かない。声も出ない。彼女が背を向ける。当たり前だ。俺は今フラれたんだから。ノミの心臓だと馬鹿にし続けてきた恋人に、ノミの勇気を振り絞らせるほど愛想を尽かされて、置いて行かれて、そのまま、俺は、

「芽衣子！」

「……………おゝ…………クソツ…………」

と、いう夢を見るときは大抵深酒をして寝落ちをし、大抵遅刻ギリギリなのが定番だ。

誰もいない部屋の中で悪態をつき、勢いをつけて起き上がる。皮脂がまとわりつく髪の毛をガシガシ引つかきながら時計を眺めた。

(やば…………風呂入らんと…………)

ふと床に視線を向けると、昨日買ったAVのパッケージが目に入る。オイルマッサーものの、エッチなDVDである。

「…………」

酔った勢いとはいえ、今時現物を買うなと昨日の俺に言いたい。これだから酔っ払いは。

（しかも、芽衣子に似てる女優……）

更に悔しいことに、昨日は酔い潰れて寝てしまったため、この『芽衣子に似た女優』で抜けていない。待つてましたと言わんばかりに股間の息子がぴくりと反応したが、もちろんそんな時間はありはしなかった。

（……………帰ってから抜こ）

二十七歳。職業・探偵（という名の便利屋）。高校の時から付き合った彼女に二年前にフラれ、未練たらたら。

そんなどうしようもない男にぴったりの、どうしようもない朝であつた。



便利屋——もとい、探偵の朝は早い。

副業がてらに始めた某スーパールの万引きGメンが板につきすぎて、普通に頼りになるベテランとして勤務しているからである。

生まれてこの方、生きるに際して困ったことはなかった。

自分で言うのもなんだが顔は良いし、頭も良いし、要領も良い。だからこそ何もかもがつまらなくて、会社という組織に属することが何より苦痛に思えて、楽な方楽な方に進んで行ったら、なんだかんだで今の肩書きを得ることになった。

人生で一番辛かったことといえば、それこそ、そんな俺の生き様を見た芽衣子に呆気なくフラれたことである。

あれから何人もの女を抱いては見たものの、その度に芽衣子と比べ

て過去の自分を情けなく思った。

天は俺に二物も三物も与えてくれたのに、一番欲しい芽衣子だけがそばにいない。

（抜いてないのに、なんだこの賢者タイム……）

店内をパトロールしながら虚無感に襲われていると、イヤホンから無線の音が流れた。カラッと元気な声が俺を呼ぶ。

『櫻田さん、対応お願いします！ お客様カウンターでXです！』

「……うーい」

返事後、すぐにため息をついた。Xとは「万引きの容疑者を確保しました」の意である。もちろんそれが仕事ではあるが、問題はこの無線の相手が空回りでお馴染みの西山ということである。

西山は、やる気もありフットワークも軽い男である。性格は悪くないが、如何せんやる気のあまり空回りすることが多々ありすぎる。

先日も無実の大学生を確保してしまい、その親からクレームを入れられた。ベテランである俺は「西山対応の対応」をする役回りとなっているのだった。

「あー……」

（帰ったら絶～～っ対、あのエロい女で抜こ……）

改めてそう決心しながら、お客様カウンターへのたのた歩く。

「えっ」

そうして、西山のそばにオロオロと立っている女に目を奪われることとなる。

「り、理人くん……!？」

今し方「抜こう」と決心したエロい女――に、似た女が、そこに立っていた。

「……芽衣子………」

情けないかな、驚いて目を丸くする彼女に、俺のジーンズの下では息子がぴくりと反応していた。



芽衣子は、ノミの心臓である。

だから身に覚えのない冤罪だとしても、デカイ男（西山）に張り付かれたせいでそれはもう、万引きを疑いたくなるほど狼狽していた。

無駄に強気な西山が言う。

「この方、カバンに何回も手を入れてて」

「やっ、あの、それは……！ め、目薬を探してて……！」

無駄に弱気な芽衣子はそう反論するものの、見方によって「やってんなこれは」と言いたくなってしまう怪しさだ。

不毛な時間は、できる限り避けていきたい。西山に「コイツ、俺の知り合いだから。俺が対応するわ」と伝えると、西山は驚いた顔で「櫻田さんに知り合いが……？」と言いやがる。俺は、お前の素直さを美德として捉えるべきなんだろうか。

そんなやり取りに苦笑いしている芽衣子を引き連れ、医務室——別名・万引き対応部屋へ向かう。道中も芽衣子は挙動不審で、そのノミの心臓に懐かしさが漂った。

「適当に座って」

医務室の扉に『使用中』の札をかけながら言い、ついでに無線に向かって声を掛ける。

「櫻田、X対応のため一旦無線切りまーす」

もちろん本来であれば無線を切る必要がない。が、恐らく西山以外
は「ああ、西山対応か……」と思ってくれていることだろう。

単にゆっくり話したいがための挙動だったが、内情を知らない芽衣
子は怪しさフルスロットルで弱々しい声を出す。

「あ、あのつ、理人くん、私、本当に目薬を……！」
ムラッ。

（……猿か、俺は）

焦りで少し高くなった声が、在りしの情事を思わせて息子が少し騒
ぐ。静かに戒め、医務室の鍵をかけた。

芽衣子の不安を和らげるために、軽い口調で返してやる。

「分かってるって。二メートルの横断歩道でも馬鹿正直に赤信号守っ
てるお前が万引きできるとか誰も思ってたねえから」
「さ、三メートルはあったもん……！」

そういうことじゃねえんだけど。

ムラッ。

(いやいや、落ち着けお前……)

どうしたんだ息子、今朝抜けなかったのがそんなに悔しかったのか。

たった一回のラリーで「懐かしい」が胃から逆流してきそうだった。

高校時代から、芽衣子はほとんど変わらない。素直で、単純で、よく騙される。だから俺は芽衣子を揶揄うのが三度の飯より好きだった。

たとえば意地の悪い視点で揶揄ったとしても「も〜」と素直に怒ってくるのが俺にはない部分で、その自分が持ち得ない可愛さがそれはもう可愛くて仕方がなかったのだ。本人には伝えたことはないが。

(……そういうところも、よくなかったんだろうなあ)

二年の月日を経て、流石の俺もそんな風に自戒するようになっていた。

芽衣子のように素直に喜んだり、怒ったり、愛したりすることがめんどくさくて、極力避けてしまおう。何故かって心の根っこから捻くれているからだ。

「でも、よかったあ……たまたま理人くんがいてくれて……いや、本当に……！」

俺の自戒を露とも知らない芽衣子は、言いながら自分のカバンをテーブルに乗せた。疑われていないことを知ってほっとしたのか、やはり昔と何ら変わりのない平和なツラである。

「危うく警察と一緒に救急車も呼ばれるところだったよ……」

「ノミの心臓だもんな」

「もゝ」

ムラッ。

「相変わらずなんだから」の「もゝ」がこんなに可愛いのは、後にも先にも芽衣子だけだろう。『平常心』という言葉は何度も頭の中で描いて、頭を持ち上げようとする息子を鎮めさせる。

芽衣子は俺の慎ましい努力なんか察してはくれないし、想像すらしていないのだろう。そんな声だった。

「えっ……もちろん何も入ってないんだけど、一応、カバンの中とか見せたほうがいいのかな？」

「あ……まあ、でも、」

いちいちめんどいし、と言いかけたところで芽衣子は重ねる。

「ポケットとか、上着とか……あ、身体検査とか？ はは、変な話だけど、理人くんなら安心だもんね」

ムラッ。

「そうだな、一応規定通り身体検査だけはさせてもらおうかな」

誰が悪いか。そう、芽衣子である。

芽衣子が、二年ぶりでも寸分違わず無防備で無警戒で無邪気で無茶苦茶に可愛いせいである。

とんでもない論理であることは重々承知だ。けれど、俺の中ではしつかりと道理だった。

（つてか、これで騙される方がアホだし）

俺にとつてはセーフティーネットのようなものだ。

ここで「またそういうこと言う」とか「相変わらずなんだから」と、いつもの「も〜」してくれば、それでいい。それで終わる。ただそれだけの話だ。

で、可愛い芽衣子はニコツと笑った。そして可愛い声で、こう返し

てきたのだった。

「うん。じゃあ、よろしくね」

（アホなんかーい）

アホ可愛い芽衣子は、何なら躊躇なく上着を脱いでいく。おいおいおいマジかマジかマジか。

薄いカーディガンを脱ぐと、半袖から芽衣子の白い二の腕がむちつと現れる。股間の息子が、むくつと跳ねた。

正直に言うと、半分は予想通りである。芽衣子は、何故だか俺を疑わない。「朝日と夕日は違う太陽らしい」というどうでもいい嘘をつく俺に、「えっ、やっぱり!？」と毎回不思議なほど騙されていた。不思議なほど、俺を信じているのである。

可愛い。同時に、虐めたい。この二つが両立することを、俺は芽衣子と知り合ってから理解した。

どうせ、明日からまた『芽衣子のいない生活』だ。

（本気で嫌がるなら、やめる）

誰に聞かせるわけでもない言い訳を胸に、芽衣子にニコツと笑いかけた。

「じゃあ、ちよつと立つて。手は机に置いてな」

そう言いつつ、芽衣子の後ろに回り込む。芽衣子が座っていた椅子をガガツと引くと、芽衣子は楽しそうに言った。

「あ、はい。……ふふ、取り調べみたいだね」

アホ可愛く、かつ無防備すぎる発言である。

（はい、今から全身取り調べします。ナカまでじつくりねつとり調べます。早いとこ逃げないと知らないよ、芽衣子ちゃん）

真剣に欲情している自分の方がアホに思えてきたが、もう息子はほとんど上を向いてしまっている。人のことを言えなさすぎるだろう。

「じゃ、触りますね」

無害そうな声を作り、背後から芽衣子のくびれに両手を置いた。そのまますうつと下に向かってゆっくりスライドさせると、芽衣子の体がぴくツと揺れる。

（あゝ……何感じてんだよ、こいつ……。早く犯してえ……）

ちんこと連動したような凶暴性を、なんとか抑える。無害そうな声を保ち、揶揄うように言ってやった。

「お客さん？」

「だ、だつてくすぐつたくて……！」

俺の発言を戯れだと捉えたのか、芽衣子はやっぱり楽しそうにクスクスと笑っている。アホ可愛いおかげで、『これから何をされるか』をまだ理解できていないらしい。

（いや……芽衣子の純粹さにつけ込んで、俺は一体何を……）

一瞬だけそう思った。が、芽衣子のぬるい体温が皮膚から伝わり、股間がぐうっと熱くなり、硬度がビビキと上がっていく。自分の愚かさよりも、芽衣子の肌の質感をじいっと見つめることの方が、何よりも重要に思えた。

「……怪しい動きすんの、やめてくださいねー」

「はぁーい」

何も知らない。何も警戒していない。無防備で、安心して切った声。

喉の奥が、じわあと重たい熱を持つ。あとは、まるで何かに操られているかのように自然と動く手に身を委ねるだけだった。

くびれから、背中を撫でる。そこから、スカートを包まれたお尻の曲線を両手でねっとりとなぞり、今度は前ももへ。

「んっ……………」

体の線を確かめるたびに、芽衣子は小さく体を揺らした。緊張した

ような吐息だ。俺の手の動きに「いやらしいこと」を連想するけれど、そんなことを連想してはいけない、と真っ当に耐えているような。

(かわいい……)

前も手を撫でている手を、ゆうっくり上へ上へと持っていく。手のひらを皮膚にべったりとつけたまま、恥骨、下腹部、へそを越えて、胸の下へ。

そのあたりから、芽衣子はあからさまに狼狽えていた。「そんなところまで？」と言っているようだ。先回りして、「悪い、身体検査だからな」とわざと謝る。

「こういうところに入る人もいるんだよ。プライベートゾーンってやつ」

「あ……そ、そうだよね………」

んなわけあるか、アホ。

単純すぎる芽衣子の反応に、分かりやすくムラムラしてしまった。
ズボンの中ではちんこが窮屈そうにしている。

「つつーわけで、触るな？」

「う、うん……」

（アホ。マジでアホ）

内心ではそう悪態をつきつつも、息が上がりそうなほど興奮していた。

二年ぶりに芽衣子の胸を手のひらに収め、もにゅ……♡と柔らかさを愉しむ。洋服とブラジャー越しでも懐かしさを感じてしまい、ちんこがビキツと硬さを増した。

「ん、……………っ♡」

（エツツツツツ……口……………）

妄想以外で「芽衣子のエッチな声」を聞くのは、当たり前だけれど久しぶりだった。思わず嘔み締めてしまい、無意識に押し付けたくなっている腰を必死に抑える。

フル勃起したちんこが、ドクンドクンと脈打っている。芽衣子の柔らかな尻に擦り付けたら、どんなに気持ちがいいだろうか。彼女は、どんな反応をするだろうか。

たくましい妄想をしながら、あたかも「検査ですよ」という素振りで芽衣子の胸をむに♡むに♡と揉んだ。

そうして年季の入った柔らかさを堪能する俺は、居心地の悪そうな芽衣子に気づかないふりをしながら、わざとらしく問う。

「んん？ ……ここ、なんかある？」

「えっ、ええ……？」

もちろん、嘘である。

けれどノミの心臓こと芽衣子は、分かりやすく動揺した。俺じゃなかったら「やってんなこいつ」と思ってしまうことだろう。

「ちよつと失礼」

だが俺は、純然たる未練たらたら元カレだ。当たり前な顔をして、たわわなおっぱいを包むブラジャーのホックをパチンツと外す。

「ひ、ええっ……!？」

ぶるん♡と重力に負けたおっぱいを掴もうとすると、その手を芽衣子の手が慌てて止めた。「理人くんっ」と叱るように言われるが、毅然とした態度で芽衣子に答える。

「手、机に置いといてって。身体検査ってこういうもんなんだよ。芽衣子には馴染みがないだろうけど、こういう仕事だからさ」

そう宥めながら芽衣子の手を掴み、再びテーブルの上に両手を置かせた。テーブルに少し重心を預けながら、芽衣子は恥ずかしそうに呟

く。

「つで、でも、疑ってないって……!」

「規定だから。一応な、一応」

余計な思考の隙を与えないよう、すぐにブラジャーのカップの下から手を入れた。すると、その勢いで俺の指がすり……っ♡と芽衣子の乳首に『当たってしまう』。芽衣子は抑えきれない声を漏らした。

「あっ♡」

「どした？」

「ッ……な、なんでもない、です……っ」

「ならいいけど。じゃ、もうちょい確認するな」

芽衣子のおっぱいをむにゅ♡と手のひらに収納し、俺は中指を浮かせた。

（乳首当てゲームだ）

とはいえ、俺にとつてはイージーもイージーだ。キッチンで飯を作る芽衣子を、何度後ろから虐めたことだろうか。

っんっ♡

「ッ……、ふ♡」

中指で乳首をつついてやると、芽衣子は甘くなつた声をなんとか耐えて飲み込んだ。

一度軽くつついただけでこの感度だ。相変わらずの感度の良さに、血流が全てちんこに集まっていくなうだった。勃起すぎて痛いほどだったが、なけなしの冷静を総動員させて気の抜けた声色を作る。

「んんー？　なんだこれ」

たん♡　たん♡　たん♡　たん♡

おっぱいを持ち上げながら、少しだけ硬くなつた乳首の頂点をタツプする。芽衣子は小さな嬌声を飲み込みながら体を揺らした。少しずつ

つ、乳首の硬さがいやらしく目立ってくる。

「ツちが……そ、れ……っん♡」

「なんかあるよな？ 硬いやつ」

「理人、くん……っ♡ 絶対、わざと……っして……♡ はっ、ん……♡」

「何が？ 仕事してるだけなんだけど」

徐々に浮き出てきた乳首を、たん♡たん♡と叩くたびに芽衣子の腰が揺れた。不意に見下ろすと、フル勃起したちんこが今にも当たりそうな近さに芽衣子の尻があった。

（当ててえゝゝゝゝ）

芽衣子の尻の割れ目にゴリゴリ♡とちんこの硬さを知らしめたい気持ちはもちろん強かったが、正直まだ早い。まだ遊べる。勃起しているのは、もはや俺のちんこだけではないのだ。

「……ほら、やっぱりある」

「ひ、あッ♡」

ぐり♡　ぐり♡

硬く勃起した乳首を指で摘んで圧をかけると、芽衣子はついに嬌声を落とした。そのまま俺にちんこに押し付ける気なのかと思うくらいぴくッ♡ぴくッ♡と腰を揺らしている。

「やつ……あ♡　だ、だめ……理人く……っん……♡」

「あー動くなつて。こっちは仕事なんだからな」

「でも、こんなの……っ♡　んっ……♡　おかし、い……ッあ、ん……♡」

「いやいや、普通だつて。みんなしてることだから」

咄嗟にそう言い、すぐに「流石にAVすぎたか？」と思った。まるでオイルマッサージものの男優のような台詞だ。

「ッ……………♡」

しかしながら、どうやら芽衣子の中では「じゃあ我慢しなきゃ」になったらしい。言いたいことを諦め、口を結んでいるようだった。

（アホすぎる。可愛すぎる。虐めたい。アンアン♡言わせて泣かせたい）

性的欲求としか言いようのない願望が、どんどん燃え上がっているのが分かった。

ちんこは痛いし、気を抜くとハアハアと息が荒くなるほど興奮している。テーブルに手をつきながら、芽衣子は必死に声を抑えていた。その必死な様をもっと見たくて、乳首をこねこね♡しながら、後ろから囁く。

「……………何？ 足震えてるけど、なんか隠してんの？ 芽衣子さん」

「ち、違……………っん♡ は……………ッ♡」

「本当に？　ちよつと確認させてもらいますよ？」

「え……あッ、つやあ……ッ♡」

片方の手でおっぱいを鷲掴んだまま、もう一方の手をスカートの中に入れる。すべすべした太ももに手のひらを引っ付けると、芽衣子は狼狽えながら言った。

「り、理人くん……っ!？」

「スカートの中也隠しやすいんだよ」

「なんで、疑って……!」

「お前が怪しい動きするから。万引きする人って結構同じような動きするんだよな」

もつともらしいことを言いながら、太ももをすり♡すり♡と撫でた。くすぐったがるように細い太ももが逃げようとしたから、グツと掴んで引き止める。言い聞かせるように、芽衣子の耳元で言った。

「でも、芽衣子には身に覚えのないことだもんな？」

暗に「だから、抵抗する理由がないよな？」と言ったのを、芽衣子はきちんと理解していた。俺の手が太ももの毛穴を確認するようにねっとり撫で回すのを、恥ずかしそうに耐えている。

「っ……んッ………」

「うんうん、何もないな」

朗らかに言いつつも、手のひらを少しずつ上へと持っていく。足の付け根に近づくほど、警戒しているような息遣いが聞こえた。

それを分かっているながら、俺は足の付け根にあるショーツのゴムをぴんと引っ張る。

「……一応、ここもいい？」

「ッ……！」

軽やかな口調は、もちろんわざとである。なんなら、もうこのまま

破ってしまいたい。俺の性欲から守る気があるのかと腹が立つてくるほど薄い生地なのだ。

少し色っぽい吐息を必死に隠す芽衣子は、小さく言う。覚悟を決めたような声だった。

「……っは、早く、してねっ………?」

アホ。マジでアホ。マジでアホで、可愛い。

「ん」

顔を見られていないのをいいことに、俺はニヤリとした顔を抑えられない。

「へ、えっ?」

するっ♡

返事を聞くなりウエスト部分からショーツの中に手を入れると、芽衣子は臍抜けた声を出した。迷いなく割れ目を目指す俺の指に、慌て

て身を振る。

「なんッ……!」

「え？ 芽衣子が早くしろっつーから」

「そうじゃな……あッ、んっ♡」

くりゅ♡

逃げようとする芽衣子の体を後ろから抑え、中指でクリトリスを潰した。それだけで芽衣子の体はびくん♡と震える。アホなほど律儀にテーブルに手を置いたままの芽衣子は、天板に向かって我慢できない喘ぎ声を溢した。

「や……っ、そこ……はっ♡ んん……ッ♡」

「あれ？ ここにもなんかあるな？ 何これ？ コリコリしてんだけど」

「あっ、や♡ あッ……ん、うッ♡」

くりゅくりゅ♡　くりゅくりゅ♡

ぷくっ♡とした硬さを持つクリトリスを押しながら捏ねるたびに、芽衣子の腰がびくびくと揺れる。

（相変わずクリよっわ……）

キッチンで乳首を弄って、否応なしにその気にさせて、膨れたクリトリスを執拗に責めるのが楽しかったのを思い出す。

（あー泣くまで虐めてえ………）

できることなら、このまま快感を逃せないように後ろから強く抱きしめて、ちんこを押し付けながら虐めたい。腫れたクリトリスをぐりゅぐりゅ♡押し潰して、「やだ、やだあ♡　イっちゃうからあ♡」と言うまで虐めたい。

けれど、露骨な愛撫は今この場においては相応しくないと考えた。この、A Vのようなエロい展開を今は楽しまなければ勿体無い。だから

らどうしようもない加虐心をなんとか抑える。「これなんですかね?」と確かめるように、ひたすら静かにクリトリスを擦った。次第に、芽衣子の腰の揺れが大袈裟になってくる。

「もっ……あ♡ 理人、く……ッ♡ ん、んっ……は……ッ♡」

喘ぎを抑えているつもりの方が可愛くて、ちんこがますます痛くなった。背後で俺がちんこをバキバキにしていることなんて、芽衣子も思ってもいないようだった。興奮しているのがバレないように、ピシヤリと答える。

「動くなつて。芽衣子の潔白を証明してるだけじゃん」

「で、も……これ……ッ♡ あッ♡ あ、ん……っ♡」

「なあ、これ何? 怪しいよな? なんか入れてる?」

「やっ……あ♡ 何……言つて……っ♡」

クリトリスをこりゅこりゅ♡と弄りながら問うと、芽衣子は喘ぎな

がらもそう言った。そりゃあ芽衣子からしてみれば「知ってるくせに」と言いたくなるだろう。けれど俺は、白々しく続ける。

「何も入れてない? 『ここ』」

ちゅぷ♡　ちゅぷ♡

クリトリスを少し通り過ぎて入り口に指を添え、音が鳴るように軽く動かした。想像よりもぬるついているから、吐いた息が熱くなる。

(エツロ……)

芽衣子の恥ずかしがりそうな言葉が、苦勞せず浮かんでしまう。揶揄いたい。「これだけでぐつちよぐちよじゃん……そんなに気持ちいい?」と。

加虐心の抑圧を頑張っていると、芽衣子は小さな声で言った。

「い、入れてるわ、け……っ♡」

「でもここ、結構でかいもん入るじゃん?」

「あっ……や、あ♡」

濡れそぼった入り口を指で叩くとちやぷ♡ちやぷ♡と卑猥な音が響く。恥ずかしがる芽衣子の耳に近づき、確認するように言った。

「指くらいなら余裕だもんな？ ……ほら」

「ッ、あ♡」

ずぷう♡

言いながら、中指を遠慮なしに挿入する。芽衣子が腰を引かせるから、その腰を体で受け止めた。フル勃起がバレないかと一瞬焦ったが、芽衣子はそれどころじゃないようだった。

「あっ……♡ あ、ああッ……♡」

悦びが混じったような喘ぎだ。より奥へ奥へと指を入れていく。進めば進むほど膣壁が、きゅ♡きゅ♡と俺の指を締め付けてきた。

（ぬるっぬる……♡ かーわい……）

柔らかくて熱いナカに頭が蕩けそうだった。奥の方を撫でるように引つ搔くと、愛液で濡れた膣内はくちツ♡くちツ♡と音を立てた。その動きに合わせて、芽衣子が高い声を出す。征服感がたまらなかった。

「やッ……ん♡ は、あ……ッだめ、んあ……っ♡」

「つつつても、確認せんと。奥まで。しっかり」

「えっ、あっ、あッ♡」

ぬぢゅう……っ♡

この途方もない性的な興奮をしっかり隠せているのか、自分でもよくわからない。芽衣子のおっぱいから手を離して逃がさないように腹を抱き抱え、今度は中指と一緒に薬指を奥まで入れ込んでいく。

二本の指の圧で、芽衣子は「あ、ああッ♡」とより一層甘い声を出した。言葉として形成されていなくても『気持ちいい』ということが

分かるほど、甘い声だった。

ナカを激しく攻めたいのを堪え、奥のぷにぷにした部分をぷにぷに♡とつつく。

「奥、何かある？」

「あつ、ん……は♡ 何にも……っない、つてばあ……ッ♡」

「あるけどなー。ほら、これ」

グチュツ♡ グチュツ♡ グチュツ♡ グチュツ♡

いまだに覚えている芽衣子の「イイところ」を、一定のリズムで擦った。ぷにぷにした箇所から少しずらしたところだ。そこを押しながら擦ると、芽衣子の膣内は面白いほどきゅうう♡と絞られていった。喘ぎを抑えられない芽衣子の足が、カクカク♡とおぼつかなくなる。

「なあ芽衣子。聞いてる？」

「や、あ♡ だめ、だめ♡ 理人くん、それっ、あ♡ 私、もお……っ♡」

（もうちよつとだな……）

膣内の締まりと芽衣子の声の高さで、芽衣子のアクメをがはつきりと確信できた。自分でもよく覚えていると感心してしまう。

二本の指の圧を少し強めて、ほんの少しだけ擦るストロークを短くした。この場所、このスピード、この圧、よく覚えていゐる。このまま擦れば、芽衣子の絶頂はすぐやってくるだろう。変に耐えることができないように、わざと芽衣子に質問を投げかける。

「何て？ だめ？ これ？ ここ？」

「ひうつ、あ♡ や、そこ、速くしちゃッ……♡ あっ、あッ、あ、ああ……ッ♡」

「聞こえんって。そこ？ どこだよ、言って」

「やつ、んんッ……♡ 理人く、んっ……あッ♡ りひと、く……ッ♡ あッ、あ♡♡」

「ん、いーよ」

（あ。やべ、つい）

「イっていいよ」という意味を込めた「いいよ」に、芽衣子は返事をしなかった。俺に後ろから抱きしめられたまま、ガニ股でまんこを狭くしていく。

（キスしてえ〜〜〜）

今にもイきそうな姿に、叫びたくなるような衝動に襲われた。手マシはするくせして、そんなことは変に憚られるのだ。

代わりに、頭の中で存分に芽衣子に声をかける。普段なら言わないようなことも、はつきり恥ずかしげもなく言えた。言えてしまうたびに、興奮が高まっていく。

(可愛い。可愛いよ、芽衣子。イって。早くイって、芽衣子。いくとこ見せて。芽衣子。イけ♡ イけ♡)

口から出かかった「イけ」を飲み込むのに必死で、息が荒くなってしまう。気づけばちこんだって押し付けていた。けれど、芽衣子は気づかない。ナカに入れた指がきゅう♡きゅう♡と膣の限界を感じ取る。

（あゝゝゝ♡ もうイっちゃうなあ、芽衣子♡ 頑張れ♡ イけ♡

「や、や、あ、りひとくっ……♡
うッ……♡♡」

ら、めえッ……つん……

きゅ~~~~♡と指を痛いくらい締め付けながら、背中を丸めた芽衣子が絶頂する。

足に力が入らないのか、芽衣子はテーブルに体重をかけながらふら

ついた。支えるように腰を抱いて助け、しれつと言う。

「お、つとと。大丈夫か？ こっち、ベッド使つていいから」

体を支えながら、医務室に置かれたビニール張りのベッドへと連れて行く。

芽衣子はぐったりとベッドに横になり、俺はついでに跨った。すると芽衣子は、俺の挙動に丸い目を大きくする。

「え、ええ……っ!？」

もちろん、抵抗する暇を与えるつもりはない。間髪入れずに芽衣子のスカートを捲り上げる。

「ひや、ちよっ……!」

「大丈夫大丈夫、俺は勝手に検査続けとくし」

スカートを抑えようとする芽衣子よりも先に、ショーツへ手をかけた。躊躇いなく引き摺り下ろし、ショーツを投げ捨てる。芽衣子が想

像通りの「パンツ……！」という顔をしたから、またちんこが痛くなった。

「じゃ、目視でも確認しまーす」

「や、待っ……！ 絶対、そんなの、嘘……っ」

「あー暴れんなって。よくいるんだよなあ、暴れる人。ちよつと手荒にさせてもらうなー？」

本当は脱ぎたてのショーツを目の前で舐めたりとか、もつといやらしいことをしたかったが我慢してやった。

何にも守れてない芽衣子の股を開かせる。芽衣子は足を閉じようと抵抗したが、それを力づくで阻止をした。

（太ももぷにぷにで気持ちいい……。吸いたい。噛みたい。痕つけたい）

しかしながら、それも今は我慢してやる。

「やだやだやだ、理人く、ぐうッ♡♡」

れろおゝっ♡♡

我慢してやる代わりに、濡れそぼったまんこを大きく舐め上げた。
むせかえるほどの女の匂いがする。

というより、芽衣子の匂いと言った方が正しいのだろう。よくよく
思い返してみても、他の女のことを舐めた記憶がなかった。

（芽衣子の匂い……♡）

そう思うと、芽衣子の太もを抑えつける手に何故か力が入る。逸
るような気持ちで、身動きが取れない芽衣子のまんこをれろお♡と、
もう一度大きく舐め上げた。

「おッ♡ や、あぁっ……♡」

「ん……動かないでください、検査してますからね」

「ん、あ♡ うそ、ぜったい、やだ……ッ♡ あっ♡ あ、それ、ら

めえっ……♡」

ちろちろちろ♡

クリトリスを口に含み、舌の先で素早く転がした。硬くなったそれをコロコロ♡と口内で遊ばせると、芽衣子は顎を上げて鳴いた。抑えつけた足のせいで快感が逃がせないのか、腰をカク♡カク♡といやらしく揺らしている。

「めーこ。検査中だつて」

「や、あッ、ん……っ♡ さすが、に、嘘っ……あっ♡」

さすがにバレてしまったらしい。まあ、それはそうだ。バレなかったらさすがにアホすぎる。

とはいえ、すぐ辞められる理性など俺にはすでになかった。

「あんまり暴れると通報しますよ」

「ば、ばかあっ♡ あっ♡ んん……ッ♡」

(……いや、つつかこれ………)

いけそうな気がする。

と、芽衣子の喘ぎ声を聞きながら思わず某芸人のようなことを思ってしまった。その声の色が、射精を促しているのかと思うくらいピンクで甘ったるかっただのである。

手前味噌ではあるが、俺は要領がいい。勘は働く方だし、その煽りを受けた芽衣子はいつだって「もうまた理人くんの思い通りになった!」と怒っていた。……まあ、芽衣子が分かりやすい性格をしているからでもあるが。

(俺のことを、嫌えてない)

その上、否定しようがないほど気持ちいいのだろう。そう理解した瞬間、腹の内が驚くほどスツキリした。今まで多少なりとも後ろめたかったのだと、ようやくと気づく。

(あ~~~~~どうしようもない)

善良の塊である芽衣子にフラれて、未練たらたらで、それでも生き方を変えなかった俺は、本当にどうしようもない人間だ。そんな人間に伴う感情が、どうしようもないわけがない。そんな自覚はとうにある。俺は、どうしようもない人間。

「芽衣子」

故に、つけ込んでやろうと思った。

「次はナカ、確認するな？」

「え？」

俺にはない清さを持つ善良的な芽衣子に、全力でつけ込んでやろうと思った。

「舌で」

「え、待って待って待って……あっ……あっ……あ♡」

太ももをがっしりと抑えつけられたまま投げかけられた質問に、芽衣子は猫のように驚いていた。返事も聞かないうちに、ニユル♡と芽衣子のナカに舌を入れ込む。

「あっ♡ あ、ああ……ッ……♡」

（ナカぷつにぷに……♡）

できる限り舌を伸ばして、芽衣子の膺壁をぬろお♡と這った。俺の舌が自身のナカを撫でるたびに、芽衣子は「あっ♡ ああっ……♡」とハアハア喘いでいる。信じられない、とでも言いたげな目で恥ずかしそうにこつち見ていた。

あ、目え合った。

瞬時に芽衣子の頬が、ぼわつと上気する。俺のせいで表情を目まぐるしく変える芽衣子が、どこまで行っても「可愛い」と思う。

（もっといイ顔見たい）

そう思ったと同時に、ぢゅううう♡と芽衣子のまんこを吸い上げた。芽衣子が焦ったような声で言う。

「やつ、だめっ、だめ♡ それ、だめえっ♡」

ぢゅばッ♡ ぢゅるるる♡♡

芽衣子の反応が可愛くてここぞとばかりに吸い上げると、頭をグツと押さえられた。もちろん、俺の性欲は芽衣子の細腕に負けるほど貧弱ではない。なんなら、その「本気で抵抗する気あんのか？」と言いたくなるか弱さに、さらに燃え上がってしまった。

（こおするの、好きだもんな♡）

クリトリスを吸いながら、あむ♡と甘噛みをする。と芽衣子は「やらあ♡」と鳴いた。きゅつと俺の髪の毛を掴む小さい手が、女の象徴であるかのように可愛かった。

「かったいなあ……なんらよ、これ」

吸い上げて硬度を増したクリトリスを、舌でぐりぐり♡しながらわざとらしく問う。けれど、芽衣子は喘ぐのに必死なようだった。

「まって、まってっ♡ 理人くん、そこ……ッあ♡ あ、だめ、だめっ♡ あんっ……やあ♡」

舌の先を細くして、ぷつくり♡したクリトリスをころころ♡したり、裏筋をぐりぐりぐり♡押し潰す。すると、芽衣子の腰は呼応するように反っていき、簡易ベッドから浮いていった。

クリトリスを食べているせいで声は出せないが、興奮が醒めやらない俺は頭の中で芽衣子に声をかける。

（やっぱクリ気持ちイイなあ、芽衣子♡ 舌で裏筋シコシコ♡されたらすぐイっちゃうなあ♡ このまま吸いながら舐め続けてやろうな♡）

赤く腫れた裏筋をシコシコ♡と舌で扱くと、俺の心中が聞こえてい

るかのように芽衣子が髪の毛をきゅつと強く掴んだ。小さな手の存在を思い出すたびに、ちんこがピクン♡と反応する。

早く、ぶち込みたい。膨張した興奮を、このナカで思う存分に擦りたい。

今にも弾けてしまいそうな欲望を抑えながら、クリトリスをぢゅ〜♡と吸い、口の中でころころ♡と丁寧に転がした。

（ほら芽衣子、イけ♡ イけ♡ さっさとイって、「おっきいやつ欲しい♡」っておねだりしろ♡ 芽衣子♡ 芽衣子♡）

「やつ♡ やツ、おっ……くる♡ くるっ♡ りひとく、んツ♡ らめ、らめって、ねえっ♡ おあっ……♡」

「んん……♡」

おそらく芽衣子は、全力で抵抗しているつもりなのだろう。なのに、弱っちい。その落差がまた可愛いと思った。

(可愛い♡ 可愛い♡ 俺に何一つ勝てない芽衣子♡ 可愛い♡)

クンニなんて、他の女にはすることすら考えなかった。多分、こんなにも楽しく舐められるのは芽衣子のまんこだけだろうと思う。

裏筋を必ず擦るようにして、クリトリスをころころ♡舐め続ける。迫り上がってくる快感に抵抗するように、芽衣子は声を高くした。

「はな、し……てえっ♡♡」

もちろん、放すわけがない。

「あ、お、やら、くる、くる、キちゃ……ッお♡♡ あ、お……っん
ん~~~~~……ッッ♡♡」

絶頂をした芽衣子は腰を大きく浮かせる。それに乗じて逃げようとするが、その動きもまた俺が逃がすわけがなかった。ビクビク♡と跳ねる足がちりと掴んで、いったばかりのクリトリスを咥え続け

る。

追いかけるようにしてぢゅううう♡と吸い上げると、芽衣子は「お♡ だめ、って、ばあ♡」と言いながらまたピクピク跳ねた。逃げようと身を振るから、今度は芽衣子の尻を掴んでぢゅぞぞぞ♡と追い討ちをかけてやる。

大きな声を耐えているのか、少し声を低くした芽衣子は慌てたように喘いだ。

「あ、待って待って待ってだめだめだめ……♡ またイ、く、イぐっ……からあ……♡ ツお♡ や、理人くん、理人くん、ばかばかばか♡ んうッ……♡♡♡♡♡ ツ♡♡♡」

ビクビクビクッ♡♡

しつこくクリトリスを追い詰められて連続で絶頂した芽衣子は、簡易ベッドにパタパタと軽く潮を落とした。ビニール張りで助かった、

と思っただけれど、そんな良識的な部分はすぐにまた成りを潜めていく。

「は……」

口周りについた愛液を舐めながら上体を起こして、芽衣子を見下ろす。すると、とろん♡とした瞳で俺を睨んでくる芽衣子は、とろん♡とした声でこう言った。

「ば、ばかぁ……っ♡」

ムラァツ。

（いや、もう、無理）

役満と言って差し支えないだろう。

（我慢できるわけがねーだろ、こんなん）

逆ギレに近いかもしれないが、俺の中の何かがブチッとキレた。

「え、え……っ？」

芽衣子を見下ろしたまま無言でベルトを外し、我慢汁を滲ませたちんこをボロンと曝け出すと、芽衣子は目を丸くした。そのアホほど迂闊な隙を見せた瞬間に、足の間へずいとい入っていく。

怒涛の展開に慌てた芽衣子は、慌てて俺の胸板を押してきた。

「え、ま、なんつ……理人くん……っ！」

「でかい声出すなって。ここクビになったら、俺の食い扶持がなくなる」

くち♡ くち♡

言葉を返しながら、芽衣子の入り口を探るようにちんこで撫でた。反り立った俺のちんこの硬さと動きに、芽衣子は目を奪われている。

「や、やつぱり、嘘……っ」

「そりやそうだろ。相変わらず素直でア……可愛いんだから、芽衣子は」

「い、いま『アホ』って言っ、ひ♡ あ、あッ、だめっ……あ、お♡」
問答無用だ。可愛いから。
(ぶち犯す)

(本編へ続く)

サークル名：オンリーユー

著者：水瓶

読んでいただき、ありがとうございました！